≪16㎜イーストマンカラー・全3巻・30分≫

≪企画・製作：長野営林局≫

■ 解説

この映画は、木曽ひのきと共に生きてきた、谷間の人々の仕事と暮らしの記録である。

映画の中でセピア調に染めたフィルムは、旧帝室林野局が、昭和五年（一九三〇年）ころから撮影を開始し、昭和十二年に編集、製作した「木曽御料林」全十巻（上映時間一時間三十二分）サイレント映画の一部である。

今回、この古いフィルムを使って、四十余年の歳月が流れた、今日の木曽の山で働く人々の仕事と暮らし、山間の風物と対照させてみた。

心ひかれるカットを選び、同じ場所を探し求め、木曽の山で働いてきた営林局の職員が、仕事の合間にキャメラを向けた、自主製作の記録映画である。

また、何年か後にこんな記録映画の企画を期待したいのである。

■ あらすじ

＜中山道の移り変わり＞

木曽は木の国、ひのきの里である。八千八谷の谷間に日本一の木曽ひのきの樹海がつづく。

山と山にはさまれた、狭い谷間を南北に貫く一本の道、これが中山道である。その街道すじに、古い石置屋根の建物が美しく並び、木曽十一宿が軒をつらね、野面にたつ石仏が訪れる人々を暖かく迎えてくれる。

しかし、古いフィルムの木曽街道の面影を四十年たった今日訪ねてみると、木曽十一宿、木曽の桟は激しく変り、木曽駒と共に生活していた、王滝村滝越の農家は廃家となっていた。

四十年の歳月の大きな流れに驚く。

＜信仰の里木曽谷＞

信仰の山御岳山へ通じる御岳街道の基点となった、木曽福島町の行人橋は、往昔の白装束と御岳講の幟に金剛杖で身を固めた信者はなく、今は信者や若者たちは、大型観光バスで海抜二千百八十メートルの田の原高原まで一気に登ってしまう。

御岳山も信仰の山から、観光登山の山へ衣がえしつつある。

＜木曽ひのきと生業＞

谷間に住む人々の生活と文化は、昔も今も、木に繋がる。木曽ひのきと共に歩み、栄えてきている。幾百年もの年輪がそこにある。

木と人との絆が木曽谷の文化を作り、人情とお六櫛、桧物細工、ロクロ細工、漆器等の伝統工芸とを、親から子、そして孫へと引継ぎ育んできている。

＜木曽山伐木運材の歩み＞

木曽山には、往昔より天下に名を馳せた独特の「木曽式伐木運材法」があった。この秘法は徳川上期の頃（寛文前後と推定されている）から、林鉄が登場する大正二年までつづく。

伐採は、藩制時代は盗伐を防ぐために、斧のみでやることを決められていたが、その後、鋸を併用し、戦後、昭和三十年代以降チェンソーにと変る。

また、古いフィルムには、今はなき「木曽式伐木運材法」の名残りの修羅や明治に入った木馬など、古い知恵とわざの映像がおさめられている。

集材機は、昭和十年代初期、直線状から曲線状集材法へと技術開発が進み、また、動力はスティームエンジンからガソリン、ディーゼルエンジンへ。これらのあわただしい変遷が回想される。

木曽谷は、三百年来常に伐木運材法の先端を歩んできたのである。

＜今はなき林鉄の思い出＞

いなせな中乗さんで知られた「木曽式伐木運材法」は、大正二年から森林鉄道に変りはじめる。昭和初期はその過渡期の終りの頃であった。

その森林鉄道も最近のモータリーゼーションと、林道開発が進んだ結果、昭和五十年三月三十一日をもって、木曽の谷間からその姿を消した。

この映画では、往時のアメリカ生れのボールドウィン製ミニSLが、玉ねぎ型の煙突からモクモクと煙をはいて一生懸命走っている、そのけなげな姿が心ゆくまでにたのしめる。

＜緑の山づくりは苗木から＞

苗木づくりは、永年の知恵と技術の積み上げによって発展してきた。まず、良質の種子を採取し、苗床へまき付ける。

苗は床替をくり返した後、四年目の春、木曽の各地の山で植付けされる。下草刈り、枝下し、間引き伐採（間伐）などの手入れを重ねる。こうしてはじめて立派な森林ができる。

自然の営みにかゝわる植林の仕事では、時が変われど大きな変化はない。

＜山で働く人々の昔と今＞

木曽山で働く人々には、藩制時代から庄屋制度や古いしきたりがあり、苦しいことも多かったことであろう。

伐採にたずさわる人を杣と呼び、小谷狩（小沢の丸太流し）や大川狩（木曽川本流の丸太流し）や、筏流しをやる人を日傭と呼んでいた。

杣や日傭の人々は、激しい労働のため、米一日一升食べたと言う。

杣や日傭の人々は、長い間、家族と離れた出稼ぎの生活であった。この人たちの唯一の慰安は月一回の山の神祭りであった。この日は揃いの法被で、木曽節を踊り唄っていた。

時代は大きく変った。昭和三十八年度から、一部を残して山泊りから、毎日、わが家から山の職場へバスで通勤することになった。町の便利な生活と、緑いっぱいの職場から笑顔が浮ぶ。

こうして時代が移り、仕事と暮らしが変っても、木曽ひのきづくりは限りなく続けられる。木曽ひのき材は、日本の木の文化のために、いつまでも生産を続けねばならない。そこにまた、明日の木曽があるのであろう。

■ スタッフ

監修……小林　正
脚本・演出・撮影・現地録音……福島道夫
撮影・現地録音助手……西村和巳
編集……（岩波編集室）藤成要一
ナレーター……（劇団民芸）鈴木瑞穂
録音・効果……福島音響効果
選曲……（日活）山川　繁
題字……牛丸登正
タイトル……たくみ映画㈱
現像……SONY／PCL

＜協力＞

木曽郡町村会／木曽踊保存会（木曽福島町）／黒木半蔵商店／緑屋櫛店／山添秀雄／小椋一市／畑中彦之丞／三浦ひさ／三浦とめ／伊藤徳太郎／竹原春二／千村英一郎／三浦惣松／山本武夫／木曽谷各営林署